

ぼくはおじいちゃんと
戦争した

ロバート・スミス 著
(あすなろ書房)
93・ス

おじいちゃんが一緒に住むことになったとき、ぼくはうれしかった。おじいちゃんが大好きだから！でも、おじいちゃんの足が悪いからと言って、2階にあるぼくの部屋を使うというのには反対だ。無理やり3階に移らされたぼくは、おじいちゃんに「謎の戦士」として部屋をゆずるように手紙を送った。室内ばきやうで時計をかくしたりもした。そのうち、おじいちゃんからの反撃も始まり、部屋をめぐる戦争はエスカレートしていく。



ちくまがわ
千曲川はんらん

いぶき 彰吾 著
(文研出版)
36・イ

2019年10月13日、長野県を流れる千曲川がはんらんした。当時、長沼地区にはそれほど雨は降っていなかった。何より地区の住民は10年以上かけて整備された堤防「桜づつみ」を信じていた。しかし、上流から押し寄せる水で、堤防は切れてしまう。「人間が頭でどんなに計算しても、自然の方がそれを上回ってくるのよ。」と、かつて災害にあった方は話す。どこに住んでいても自然災害を受ける可能性がある日本、私たちができることは何か考えたい。



青の読み手

小森 香折 作
(偕成社)
91・コ

下町の案内役をしていた少年ノアは、男から「修道院にある一冊の本をとってきてほしい」と頼まれる。その本の中身は白紙だと言う。あやしい仕事だと感じながらも、本とひきかえに行方不明になっている口ゼ姉さんの居場所を教えるという約束を信じて、修道院に入りこんだノア。見つけたのは、白紙に突然黒い文字が現れる魔法の本だった！本をねらう黒魔術師、王座をねらう裏切り者、口ゼ姉さんそっくりの王女...なぞめく王宮を舞台に繰り広げられる本格ファンタジー。

物語部門

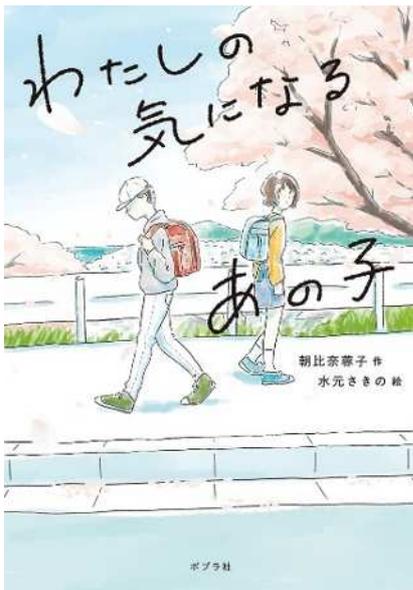


わたしたちの物語のつづき

濱野 京子 作
(あかね書房)
91・八

あおい 碧衣は学校で小さなノートを拾う。開くと『妖精リーナの冒険』という物語が書かれていた。物語は途中で終わっていたが、碧衣は気弱な主人公のリーナに共感し、続きが読みたくてたまらなくなる。字のクセからノートの持ち主をさがし当てた碧衣は、続きを書いてほしいとお願いするが、碧衣以外に「面白い」と言ってくれる子がいないければ続きは書かないと言われてしまう。「面白い」と思う気持ちはみんな同じだろうか。物語を完成させるために碧衣は奮闘する。

物語部門



わたしの気になるあの子

朝比奈 蓉子 作
(ポプラ社)
91・ア

クラスメートの詩音^{しおん}が、ある日突然頭を坊主にしてきた！服装も今までスカートだったのに、ジーンズ姿だ。みんなは詩音に冷たい目を向けるが、瑠美奈^{るみな}はみんなの態度を疑問に思う。女は女らしくいるのがそんなに大事？髪型や服装にとらわれない女らしさだってあるはず…。詩音を放っておけない瑠美奈は、一大決心をする。



池の水なぜぬくの？

安斉 俊 著
(くもん出版)
481・ア

池の水をぬくのはなぜだろう？増えている外来種の生物を見つけて捕まえるため？もっと深い理由がある。生物が住みやすい環境を保つには、池の底にたまった古い泥を出さなければならないのだ。何日もかけて池の水をぬき、そこに現れる生態系を知ること、地域の遺産を守ることに結びついている。



物語部門

夢をかなえる未来ノート

本田 有明 / 著
(PHP 研究所)
91・ホ

5年生の陽翔^{はると}の夢はプロ野球選手になること。今のところは、二番手投手でチームの中心的選手。一方、双子の弟大翔^{ひると}はやさしくて勉強もでき、夢は発明家。弟に引け目を感じてちょっぴりくすぶっていた陽翔だが、担任の先生の最後の授業をきっかけに、夢の実現計画について考え始める。目標に向かって少しずつ行動していくなかで、友達から刺激を受けたり、思わぬ出会いもあって...



物語部門

サイコーの通知表

工藤 純子 / 著
(講談社)
91・ク

朝陽^{あさひ}の通知表は、『よくできる』も『もうすこし』もない。真ん中の『できる』の列に丸が並んでいる。幼なじみの大河に「ふつーじゃん」と言われ、胸がズキンと痛んだ。通知表がふつうの人間ですという証明書みたいに思える…。朝陽は先生に通知表をつけることを思いつき、クラス全員で計画を立てた。さて、できあがった通知表は？



ゴリラんとわたし

フリーダ・ニルソン 作
(岩波書店)
94・二

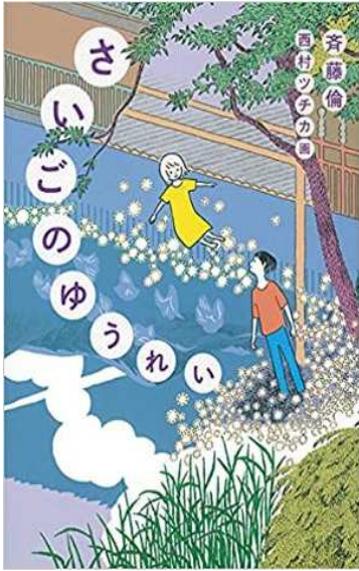
9歳の女の子ヨナは、親のいない子の家<ヨモギギク園>で、厳格な園長ヤードのもとで暮らしていたが、ある日、ゴリラのゴリラんに引き取られることになった。最初は、ゴリラんに食べられると恐れていたヨナだったが…。



サステナブル・ビーチ

小手鞠 るい 作
(さ・え・ら書房)
91・コ

七海は小学6年生の男の子。夏休み、ハワイで大きなキャンパスに絵を描くピカケという女の子と出会った。ピカケは、海洋ゴミの問題に向き合い、たった一つの海を取り戻すためのアクションとして絵を描いているのだ。海洋プラスチックゴミの現実と、海の豊かさを守りたいというピカケの思いを知って、自分も海を守るために行動すると約束し、七海は日本に戻る。



さいごのゆうれい

齊藤 倫 著
(福音館書店)
91・サ

田舎のおばあちゃんの家で夏休みを過ごすことになったハジメは、ネムという小さな「ゆうれい」の女の子に出会った。ネムは、ゆうれいの国の人口が減り続けていて、自分がゆうれいのさいごの一人かもしれない、と言う。ゆうれいの国を救おうとするハジメだったが、それは、人々に、忘れていた「かなしみ」や「こうかい」を思い出させることだった。



イカル荘へようこそ

にしがき ようこ 作
(PHP研究所)
91・二

両親といっしょにいることがつらくなって家を飛び出した真子。偶然入った画ろうで出会った夏鈴さんの住むイカル荘で、真子は両親と離れてホームステイをさせてもらう決意をする。インドネシアからの留学生デフィンや夏鈴さんの甥でクラスメートの颯太らといっしょに生活するなかで、自分一人ですること少しずつ増えていく。苦しかった毎日から解放され、自分の進むべき道を模索していくうちに、真子の両親に対する思いも変化する。



命の境界線

今西 乃子 著
(合同出版)
489・イ

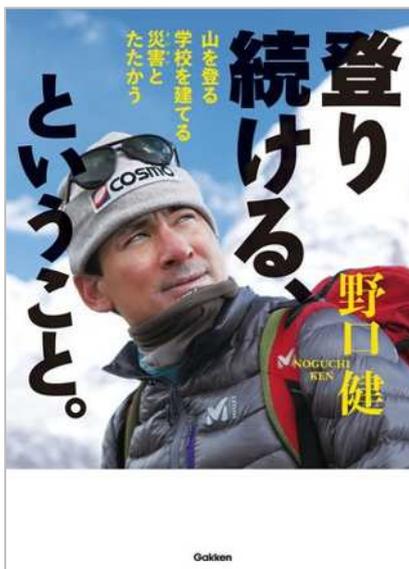
奈良公園では天然記念物に指定されているニホンジカが、「奈良の鹿愛護会」によって大切に育てられている。しかし一方で、隣県の山にいる野生のニホンジカは、田畑を荒らす有害獣として駆除されている。同じ鹿の命に、大きな違いがあるのはなぜだろう。その理由は、私達の暮らしに大きな関わりを持つ。今だけでなく、未来を見すえて選択することが求められている。



聞かせて、おじいちゃん

横田 明子 著
(国土社)
31・ヨ

1945年、広島^{もりまさただあ}の原爆を経験した森政忠雄さんは、ずっとあの日のことを語ることはなかった。でも、孫の友紀子ちゃんが自由研究で当時のことを聞いてきた。重い口を開くと同時に、自分が語り伝えられることの大切さに気づく。つらい気持ちを乗り越えて森政さんは『原爆の語り部』の活動を始めた。



登り続ける、ということ。

野口 健 著
(学研プラス)
78・ノ

高い山に挑戦し続けるアルピニスト野口健さん。登山の成功は生きて帰ってこそ。だから天候や体調の変化から途中下山を判断することは、失敗ではないと言う。また登山活動の一方で、山の案内役をしてくれるシェルパを支援し、学校を作り、山の清掃なども行なっている。様々な困難に立ち向かうエネルギーの原点にせまる。

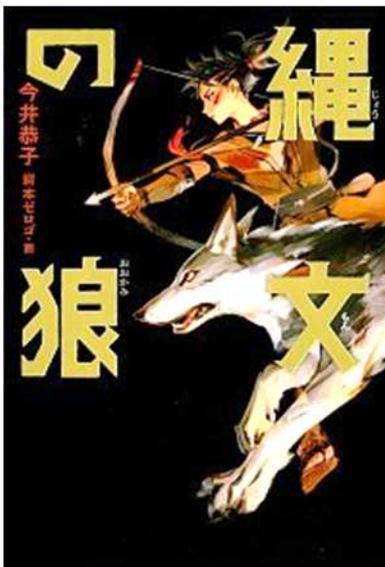


物語部門

はじめての夏と キセキのたまご

麻生 かつこ 作
(ポプラ社)
91・ア

5年生の夏、世夏は引っ越し先の小さな村で、恐竜好きな二人の少年と出会う。二人は、となり町で恐竜の化石が見つかったことから、自分たちの村にも化石が眠っていると考え、「恐竜化石の発掘」を自由研究にしようとしていた。世夏も加わり、一緒に発掘に出かけることに…。となり町から続く地層では、貝や植物の化石がすぐに見つかった。でも、恐竜の化石はそう簡単には見つからない。夏休みもわずかとなった日、世夏が真ん丸の石を見つけた！三人の自由研究は、世紀の大発見となるか？！



物語部門

縄文の狼

今井 恭子 作
(くもん出版)
91・イ

少年キセキには狼に育てられた過去がある。発見時にいた狼オオアシが残した狼犬の子ツナグとキセキは、ともにかげがえのない友として成長する。ある時、キセキが川で見つけた舟に乗ると、鉄砲水で海へ押し出されてしまった。ツナグも舟に飛び乗るが、見知らぬ土地へと流されていく。危機が迫ると必ず助けてくれるツナグとの絆、新しい家族との出会い、自らの生き方を問うキセキの思い…縄文時代を舞台とする壮大なファンタジー。



物語部門

名物かき氷！復活大作戦

草香 恭子 作
（岩崎書店）
91・ク

東京から滋賀に引っ越してきた俊^{しゅん}。夏休みに幼なじみの樹^{いつき}が来てくれたので、二人で夏限定のご当地かき氷屋に行くと、おしゃべりなおばあちゃんが一人で店を開いていた。おばあちゃんの手作りアイスは十分おいしかったが、地域の人たちは「扇屋スペシャル」というかき氷がおすすめだと言う。「来年は扇屋スペシャルを食べにこよう」と樹と約束した俊だったが、一年後、おばあちゃんが高齢のため閉店したことを知る。樹のために自分で「扇屋スペシャル」を作ろうと、俊はおばあちゃんに弟子入りを決意する。



物語部門

スウィートホーム わたしのおうち

花里 真希 著
（講談社）
91・八

きびしすぎる父、片付けが苦手な母、小さい妹とくらす千紗^{ちさ}の家は、足のふみ場もないほど散らかっている。美化委員のポスターで「美しい場所には美しい心が宿る」という言葉を見た千紗はドキッとす。家でも学校でもイライラする私は、美しくない場所にいるから心が美しくないのかな…。友達のきれいな家に行った時、明るく軽やかな空気の流れを感じた千紗は、自分の部屋を片付けることから始める。心に変化は訪れるのか？

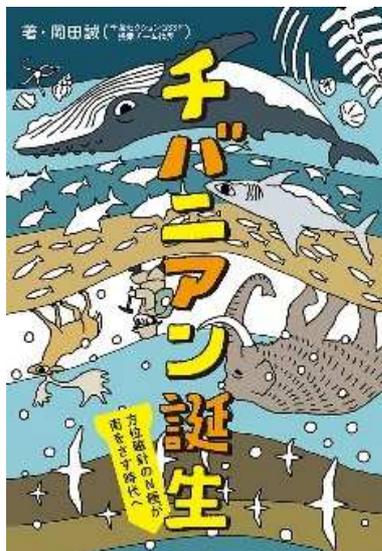


世界でいちばん 優しいロボット

岩貞 るみこ 文
(講談社)
28・イ

吉藤健太朗さんは、自分の経験から人々が感じている孤独のつらさをなくしたいと思い、孤独をいやす友達のようなロボットを開発しようとした。しかし、本当の意味で孤独から人を救うのは、人しかいないと気づく。そうして開発したのが、離れた場所においても人とつながることができる分身ロボット「オリヒメ」だった。表題作「世界でいちばん優しいロボット」に挑む吉藤さん、チョコレートで幸せを運ぶ石原紳伍さん、魚をとりすぎないように小さな魚はにがす漁師の齋田芳之さん、3人の生き方を伝える。

ノン
フィクション
部門



チバニアン誕生

岡田 誠 著
(ポプラ社)
456・オ

地質年代に承認されるには、その年代に地球で起こったことの痕跡が一番よく保存されていると証明されなければならない。この本では、77万4千年前の痕跡を残す千葉セクションを研究し、チバニアンしやうにんの名称承認を目指した科学者の国際的な競争や、地層や地磁気ちじきについての知識が紹介されている。研究結果だけでなく、その成果を広く理解してもらう意義についても考えさせられる。最初にある「本書の読みかたガイド」を参考に、興味のある章から読むのがオススメ。

ノン
フィクション
部門



りぼんちゃん

村上 雅郁 作
(フレール館)
91・ム

物語部門

小学6年生の朱理^{あかり}は、家族や友達に子ども扱いされるのが不満。先生に転校生の理緒^{りお}のことを頼まれ、少しずつ仲良くなっていく。楽しそうに話を聞いてもらえることに喜びを感じていた朱理だが、理緒から家族のことを打ち明けられ、理緒のかかえている痛みと暗闇を知る。どうしたら助けられるのか？思い悩む朱理に、ある日理緒から泣きながら電話がかかってくる。



人魚の夏

嘉成 晴香 作
(あかね書房)
91・カ

物語部門

知里^{ちさと}のクラスにやって来た転校生の夏は、実は人魚だった。その秘密は知里だけが知っていて、1年間誰にも話さなかったら、人魚が大人になってから陸で生活できる権利が得られるというものだった。男子にも女子にも見える夏は、「神秘的できれい」とすぐに人気者に。ところが、合唱コンクールの練習で夏が歌わないことをきっかけに、自分勝手だと思われ孤立してしまう。



物語部門

ぼくの弱虫をなおすには

K.L.ゴースティング 作
(徳間書店)
93・ゴ

ゲイブリエルには怖いものがたくさんある。1番怖いのは5年生になること。2番目に怖いのは1学年上の上級生。5年生になったら同じ校舎になるから、いじめられるに決まっている。親友の黒人の女の子フリータは、いっしょに5年生になるため、弱虫を克服する作戦を考える。途中まではうまくいくのだが…。アメリカを舞台に人種差別や格差にふれながら、2人の成長を描く。

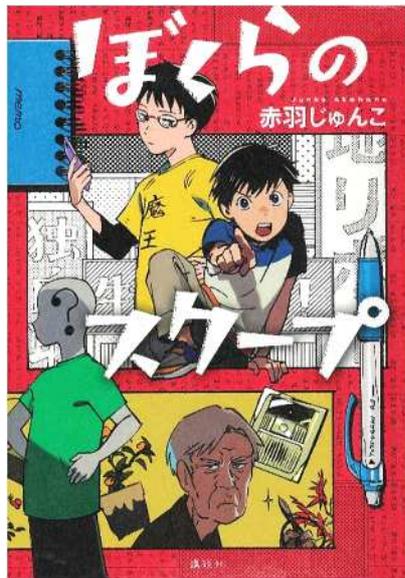


物語部門

青く塗りつぶせ

阿部 夏丸 作
(ポプラ社)
91・ア

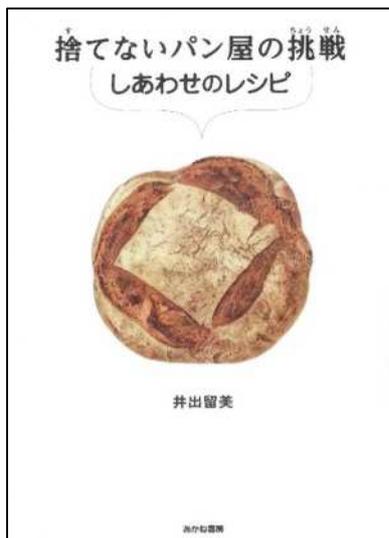
1年前、小さな島に引っ越してきたセイ。海では熱帯魚やウミボタルが当たり前に見ることができる。この美しさに気づいたミナミのアイデアで、セイたちは海の生き物やビーチグラスをネットショップで売ることに。目標は100万円！お金が集まったら、大切な友達に渡したいと考えていた。しかし、テレビに取り上げられたのをきっかけに、順調だった活動に暗雲がたちこめる。大人たちを巻き込んで、島の問題へと発展していく。



ぼくらのスクープ

赤羽じゅんこ 作
(講談社)
91・ア

学級新聞に、みんなを驚かせるスクープをのせたい新聞係のイダッチ。自分が犯人だと決めつけられた事件の真犯人を探し出して、真実をあきらかにしたいと思っている。けれども、一緒に新聞を作るクラスメートの「魔王」に、ものの見方は人それぞれだから、真実かうそかも人によってちがうのではないかと、編集会議で言われてしまう。学級新聞は無事完成できるのだろうか？



捨てないパン屋の挑戦 しあわせのレシピ

井出 留美 著
(あかね書房)
28・タ

田村陽至さんは「捨てないパン屋」。食品添加物を使わず、まき窯と天然酵母で焼き上げるパンが自慢で、しかも売れ残ることはない。そうなるまでに、長い時間がかかった。もともと実家のパン屋を継ぐつもりはなく、環境問題にかかわる仕事をしたかった田村さんは、日本やモンゴルを旅したり、フランスのパン屋で修業したりするうちに、「食べものがいちばんの環境問題」だと気づいたのだ。



物語部門

崖の下の魔法使い

吉野 万理子 作
(学研プラス)
91・ヨ

もし、いやな思い出やつらい思い出をだれかに預けて忘れられたら、すっきりして楽になれるかな？ミケが引っこしてきた町には「おもいで質屋」を開いている魔法使いがいた。20歳になるまで子どもは何度でも思い出を預けられる。でも、時には取りもどしたくなる思い出もある。ミケ、大河、夕紀、それぞれに起こる出来事が、思い出と向き合うことに。



物語部門

そらのことばが降ってくる

高柳 克弘 作
(ポプラ社)
91・タ

中1の時のイジメをきっかけにソラは保健室で過ごすようになった。そこへ俳句好きのハセオ、ユミが集まり、「ヒマワリ句会」を結成した。写真のように瞬間を捉え、短い言葉で表現する俳句だが、そこに思いを込めることで自らを表現することを知ったソラ。学校中で新春俳句大会が行われることになり、彼が読んだ句は...

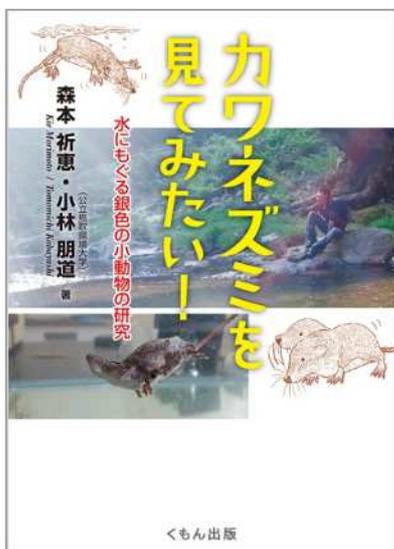


天の台所

落合 由佳 作
(講談社)
91・才

物語部門

てん
天の家は4人家族。お父さんと3人兄弟の天、^{ひかり}光、^{はる}陽。お母さん、おばあちゃんがなくなっ
てから、食事はあれ放題。でも、近所のがみババの家からいいにおいがして、天が
中をのぞいたことをきっかけに、天の料理修業が始まる。がみババの教えはきびし
かったが、天は家族のお弁当を作れるほどに成長する。天の料理は光や陽の心も開き、兄弟
で料理コンクールにいどむことを決意する。



カワネズミを見てみたい!

森本 祈恵 著 小林 朋道 著
(くもん出版)
489・モ

ノン
フィクション
部門

森本さんは、高校3年生の時、動物を研究している小林先生と学生、動物たちの日常を描いた本に出会い、舞台となった公立鳥取環境大学への進学を目指す。小林先生のゼミでカワネズミを調査したいと考え、研究を進め大発見に至る。知りたいことを挙げるだけでなく、それがテーマの解明になるような研究の芯を明確にするようアドバイスを受けるなど、森本さんにとって先生の導きの大切さが感じられる。先生のコラムが挟まれ、ともに新たな発見を楽しむ師弟関係や研究室の雰囲気がかがわれる。

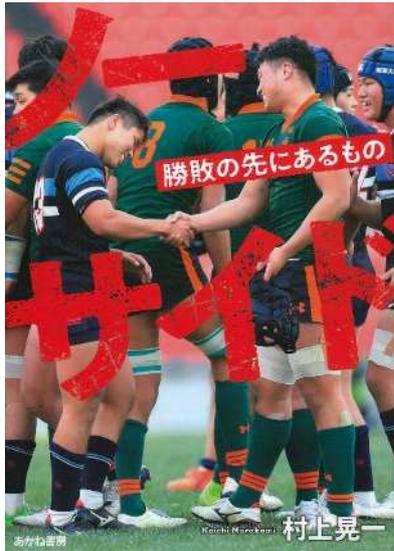


クマが出た！
助けてベアドッグ

太田 京子 著
(岩崎書店)
65・才



近年クマの目撃情報が増加し、危険な害獣として大量に駆除されている。ベアドッグは、人家に近づくクマを森へ追い返し人里は怖いものとクマに教育するために、特別な訓練を受けた犬だ。クマは人間の隣人であり「人とクマの間に立ちたい」と願う順平さんや元さんは、クマを「生かす」ための対策を重視している。クマとの共生を目指す職業犬ベアドッグの訓練や活躍を知ること、自然と人との共存について考えさせられる。



ノーサイド

村上 晃一 著
(あかね書房)
78・ム

高校ラグビーの全国大会「花園」では、試合が引き分けで終わると、抽選で次の試合に進むチームを決める。それでは選手がかわいそうだ、という意見もある。東福岡高校と東海大^{きょうせい}大阪仰星高校は、「花園」で何度も優勝を競ってきた。勝ち負けを超えて、お互いに尊敬しあい、認め合うライバルだ。「ノーサイド」とは、試合が終われば友達になる、という意味。準々決勝で戦うことになった2校の「感動的な引き分け」が、本当のスポーツの価値とは何かを教えてくれる。



物語部門

ソラモリさんとわたし

はんだ 浩恵 作
(フレーベル館)
91・八

「やばい…」秘密のメモ帳を落とした！いつも途中で終わってしまうけれど、だれにも見られたくない作詞が書いてある。美話のメモ帳を拾ったのは、コピーライターのソラモリさんだった。映画のキャッチコピーを1日10本、10日で100本考えて、宣伝部に送るような仕事だ。ソラモリさんと一緒に過ごすうちに、美話は言葉の使い方の大切さを知る。自分の思いに向き合い、書きかけになっていたメモ帳の作詞を完成させる。

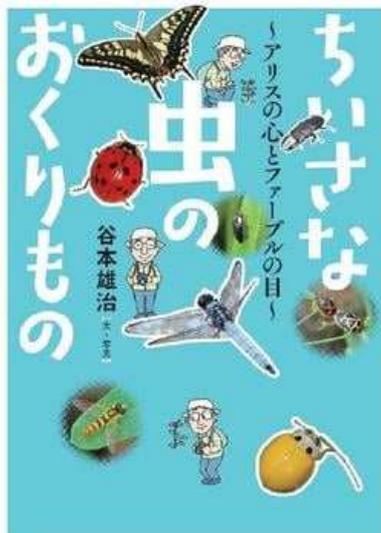


ノン
フィクション
部門

よみがえれ、マンモス！

令丈 ヒロ子 文
(講談社)
457・レ

4000年前には絶滅したというマンモスをよみがえらせることなんて、できるだろうか。1996年、クローン羊がたん生したのをきっかけに、近畿大学で「マンモス復活プロジェクト」が始まった。しかし、復活に必要なマンモスの細胞がなかなか入手できない。シベリアの凍土から、良い状態のマンモスが見つかったのは、発足から17年たった2013年。細胞は生きていた！もし復活に成功したら、絶滅した生き物を救えるのではないか。科学者たちが100年かかっても追い続けようとする研究にせまる。



ちいさな虫のおくりもの

谷本 雄治 文 写真
(文研出版)
486・夕

谷本さんは、庭や公園、田んぼで虫の観察をするのが好きだ。なかなか会えないと思っていた虫が、自分の家の庭で見つけた時には、「こんなすごい虫がいたなんて！足元にもっと目をむけないといけないな。」と生き物から学ぶ。大切にしているのは「なんでだろう」という疑問の「？」と、「へえ、そうだったのか」というおどろきと感動の「！」。この二つがあれば、毎日が「不思議な日」となって、見える世界が変わる。